

ブース 発表大会



岡山県 B-10 倉敷翠松/笠岡/金光学園/矢掛/創志学園/おかやま山陽/就実/倉敷古城池高校/岡山大安寺中等教育学校/西備支援学校
白石踊800年の伝統を受け継ぐ会
白石踊800年の伝統を受け継ぐ



香川県 D-5 香川県立三本松高等学校
三高みんなの食堂プロジェクト
三高みんなの食堂プロジェクト



佐賀県 H-10 佐賀県立唐津東高等学校/
致远館高等学校/武雄高等学校
SAGAでんと
佐賀県の高校生による、佐賀県のための活動



熊本県 B-3 熊本県立南稜高等学校
総合農学科環境コース「もっと」木育! 推進班
「もっと」木育!〜「がんばろう!人吉・球磨」地域資源を活用した、人々の心に寄り添う復興支援活動の継続と展望〜



岡山県 C-4 おかやま山陽高等学校
献血・骨髄バンクチーム
献血・骨髄バンクボランティア



岡山県 C-5 清心女子高等学校
国際系2年 (Amour Four Cambodia)
カンボジア支援からカンボジアとの協働へ



岡山県 C-10 岡山県立倉敷古城池高等学校
ワッショイ!とーかーす 子ども食堂チーム
フードロス問題を地域から
〜子ども食堂での活動をきっかけに〜



熊本県 E-10 熊本県立熊本高等学校
甘味くらぶ
熊本の銘菓を発信



熊本県 D-4 熊本県立熊本高等学校
復興支援隊 がまだすモン!
熊本城の復興支援



大分県 B-9 大分工業高等専門学校
足踏みミシンボランティア活動
足踏みミシンボランティア



岡山県 A-11 岡山県立矢掛高等学校
井原の魅力発掘委員会
大河から井原をメジャーに



岡山県 H-7 山陽学園高等学校
地歴部
「シンビック・テック」を活用した海洋ごみ問題解決への挑戦
〜「SDGs×ICT」による市民協働意識の醸成〜



広島県 G-5 広島市立広島工業高等学校
平和の板金術師
「ものづくり」から「へいわづくり」へ
〜広島工業高校生の平和活動への取り組み〜



宮崎県 A-13 宮崎学園中学校・高等学校
インターアクト部
「Pamodzi」



宮崎県 D-15 宮崎県立飯野高等学校
生活文化科プロジェクト
つなぐ 〜私たちが懸け橋に〜



沖縄県 E-8 沖縄県立北部農林高等学校
エコ部
北農さくらプロジェクト 〜桜を広めるために〜



山口県 A-7 宇部フロンティア大学付属香川高等学校
ユネスコ部
反射材で命を守る!
小物の製作販売と募金で子供たちの教育支援!



山口県 H-15 山口県立柳井商工高等学校
まちづくりプロジェクトチーム
山口県の高校生パワーと伝統工芸技術を融合させ盛り上げます!!



徳島県 A-8 徳島市立高等学校
家庭クラブ
Sustainable Action in Tokushima



徳島県 E-7 徳島県立徳島商業高等学校
校内模擬会社ComCom
まちに笑顔のいろどりを 〜上勝から繋がる交流の場〜



徳島県 C-9 徳島市立高等学校
市高ドナーアクション啓発委員会
臓器移植に関する啓発活動



徳島県 D-13 徳島県立阿南光高等学校
緑のリサイクルソーシャルエコプロジェクトチーム
地域の環境保護からはじまる地方創生への取り組み
〜ふるさとの自然を未来につなぐ隊〜



個性豊かなブースの数々の充実した2日間になりました!



応援団 パフォーマンス

第1回大会から欠かさず応援してくださっている応援団の皆さんが、一日目の発表大会終了後にそれぞれパフォーマンスを披露してくださいました。



トップバッターのテツandモのお二人は、学校生活あるあるの「なんだろう」を連発して、会場は爆笑の渦。さらにテツさんが「みんなのこれからの活躍を願うため」と、顎の上に大会ロゴマーク旗が巻いてあった長い筒を乗せる大技を決め、大喝采!

続いて、来年デビュー20周年を迎える湘南乃風の若旦那こと新羅慎二さん。アコースティックギターの弾き語りで「応援歌」を披露し、「皆さんの姿を見てると自分が、今年、来年、どう動こうかって勉強になるので、逆にありがとうって言いに来ました」と語り、さらに「心配なんてどこにもない。何事もうまくいく」という暖かいメッセージが込められたポップ・マーリーの「Three Little Birds」のカヴァーを披露。



さらに、ももいろクローバーZが登場。四人もYouTubeでブース発表を熱心に視聴していたそうで、「たくさん活動されていて、私たちもたくさんパワーをもらいました」と感謝の言葉を述べて、「吼える」を熱唱。「光の向こうまで吼える」というサビのとおり、力強い応援ソングでした。



そして、締めはさだまさし。ギターを手に現在のロシアのウクライナ侵攻について言及。「戦争がなければ、人々は自分と向き合って自分を高めていくことができる。平和とは、どういうことなのか。志の豊かなあなたの方に考えて欲しい」と語り、新曲の「キーウから遠く離れて」を歌唱。さらに「風に立つライオン」を披露したあと温かいエールを送りました。「皆さんはこれからさまざまな経験をするとお思います。たとえ失敗したとしても、それを償うために未来がある。辛いことがあっても頑張って生き抜くことで、その失敗が失敗と呼べないものに変っていくんです。未来も過去も同じように変えられるんです」



シンポジウム

テーマ：私たちの未来について

【司会】寺島尚正・川島葵(通訳)
【スペシャルナビゲーター】鎌田實(風に立つライオン基金評議員 諏訪中央病院 名誉院長)
【パネリスト】村田慎二郎さん(国境なき医師団日本事務局長) 村田諒太さん(プロボクサー-HEROsアンバサダー)
川崎レナさん(株式会社ユグレナ2代目CFO) 中原舞子さん(東京学芸大学教育学部4年生)
マヌ・ジョンソンさん(バヌアツ赤十字社所属ユースボランティア バヌアツ工科大学付属高校2年生/バヌアツからリモート参加)



2日目の午前中は、各界の識者たちを招いてシンポジウムが開かれました。5名のパネリストの皆さんには事前に基調講演を収録させていただき、高校生たちはそれをYouTubeで視聴した後、「わたしたちの未来について」というテーマで、パネリストへの質問を提出してもらいました。今回は初めて海外ともzoomで繋いで、大変活発な意見交換が行われました。

Q1:世界を制したことで、人生についての考え方、捉え方が変化したということはあるですか?

栃木県立矢板東高等学校 リバラルアーツ同好会チームあさぼらけ
山田美月、大串絵莉香、根岸叶羽、植木猛至、今井勇喜、池亀晋作

村田(諒) / 自分が変わったのではなく周り(の対応など)がまず変わるんです。周りが変わったことに対して自分がそこに順応していく。良くも悪くも。目標(金メダルや世界チャンピオン)をかなえたというシンプルなものだったはずなのに、周りの環境が自分を持ち上げて、その中で勘違いしていき自分がいる。何かを成し遂げれば少しは自信になることはあるけれども、周りが変わっていくのです。そこで気をつけたいのは悪く変わらないこと。勘違いをしないこと。何かをやった(世界を制した)から変わる、変わらない——それは自分の反応でしかない。反応を間違えた時に、修正できるかどうか大事で、僕にとっては、そういうことを教えられるものだった。(世界を制したという)単体では何も起きないです。起きたハレーションにおける自分の対応が、何かを変えてしまうということですね。生徒 / 僕たちはこれから人生の変わり目があると思うんですけど、もし何かを成し遂げたとしても自分の中の何かが変わらないということが大事だと思いました。学校生活でも勘違いしてしまうことがありますが、自分を曲げずに純粋さだけ持ってこの先進んでいきたいなと思います。

Q2:私もボランティアをしていて、大人の力とは比べ物にならない無力さを痛感しました。そういう時はどのように動けばいいのでしょうか?

兵庫県立宝塚北 / 三田学園 / 須磨学園高等学校 ブックファームガーデン
福原心寧、楠本夕葵、大川央咲

川崎 / 今の社会の風潮もあって、旬のZ世代の話を知りたいとか、どうにかして企業の中や行政の中に、高校生、中学生、小学生の意見を取り入れたいと考えている方が、たくさんいらっしゃいます。私の意見でこんなにも重要なんだとか、こんなにも人に聞いてもらえるんだって、自分でも驚くことがすごくあります。この会社、気になるなどか、この問題、どうにかしたいと思ったら、関係している組織の人に、まずは、電話かメールをしてみることで、意外と返信をもらえると思う。そこは、自分のバリュー、高校生としてのバリューを信じて欲しいなと思います。生徒 / 周りの先生や大人たちが私たちと比べ物にならないパワーを持っているので、子供の力ではどうにもならないと思ってしまふんですけど、私たちが中心となって活動を積極的に盛り上げていきたいと思いました。

鎌田 / SDGsに関して言えば、我々大人のほうがしっかりしていないところがあります。今お話いただいた川崎レナさんとリアクションしてくれた高校生たちの世代がこの国を引っ張っていってくれる感じにならないとこの国は変わっていかないと思う。最初は無力感があるかも知れないけど、じわじわ変えていってもらうことが大事な気がします。寺島 / 他にも同じように無力感を感じるという方はいらっしゃいますか?(手が挙がる)生徒 / お金のこともそうですが、大人とは能力的な差もあるし、意見をなかなか聞いてもらえないところでも無力感を感じました。(浜松開誠館中学校高等学校 SDGs部 増井瑛太)川崎 / めちゃめちゃ共感します。でも、もっと自分を信じてもいいんじゃないかなと思います。この場でパッと手を挙げられるのもすごい能力だと思うし。大人も私たちと同じような生い立ちや、同じような課題感や夢を持っている方がいると思います。私たちは無力ではなくて、(大人たちを)ハッとさせられるような起爆剤のような存在なのではないかと思っています。大人に比べて劣っている部分はあっても、感情や情熱、人を動かす力はもしかしたら私たちがの方があんじゃないかと思うので、皆さんにも期待しています。

Q3:「ボランティア・アワード」に参加して、自分の中で成長できたことは何ですか?

千葉県立国府台高等学校 生物部
高橋佐英、矢野智也、秋山陽平、田村向日葵、佐藤香名子



中原 / こんなにも沢山の、自分とは同じ志を持ちながらも別の活動をしている同年代の人に出会えることって、普段はなかなかないと思います。昨日会場にやってきて、こんなにいろんな活動をしている人がいるって思ったんじゃないでしょうか。自分たちの活動だけではなくて、別の活動をしている人は関係ないように思えるけど、一緒に手を取り合って何か新しい物を生み出したり、自分たちの部活動だけで終わらせてしまわないということですね。私は2017年に「高校生ボランティア・アワード」(以下高校生VA)に参加して、その時にお友達になった他校の子と、「高校生VA」が終わってから、「こういうイベントがあるから、一緒に学生実行委員会として企画してみない?」というお話がありました。「高校生VA」への参加を通じて、(地元)県や学校を超えた繋がりができたから、新しいステージへと繋がりました。学校や部活動という枠を超えて、同年代の仲間と一緒に、よりよい地球や未来のために頑張ることができる、そういう力を身につけられたことが、私にとっての成長ではないかと思っています。生徒 / 一日目の時点で様々な経験ができて、自分でも成長に繋がれることができるんじゃないかと思ったので、このシンポジウムも含めいろいろな意見や発表を聞いて、自分の学校に持ち帰って部活のみならず成長できたらなと思います。





鎌田／今回は、発表するだけでなく、発表を聞きに行こうという時間がありますよね。(参加校の中には)同じような活動をしているグループがあるはずで、大会をきっかけに、「繋がる」というキーワードを大事にしてみると、面白いと感じました。

寺島／今日もありますけれども、1日目どこかと繋がったという方いらっしゃいます?(手が挙がる)

生徒／この格好(徳川家康をイメージした)をしていたお陰もあるんですけど、とても沢山の学校の方と交流できて感無量です。(オイスカ浜松国際高等学校 環境SDGsプロジェクト 竹内万由)

Q4:地球温暖化にはどのようにアプローチしたらいいと考えますか?

広尾学園高等学校 じゃかぶろ
土橋由佑愛、下田結、榎本華子、古道菜奈、青木瞭、小倉美帆

ジョン／まず、地球温暖化の原因やそのリスクを減らす方法について、地域や社会でより多くの人に知ってもらう必要があると思います。そうすれば、気候変動の影響を経験したときに、どのように対応すればよいかかわかると思います。もうひとつ、バヌアツの報道や通信システムの改善は、通信アクセスに課題を抱えるバヌアツの多くの地域にとってとても重要なことです。例えば、バヌアツの中央部に位置するシェファ州のエマエ島では、通信アクセスが地域の課題となっています。通信塔の発電機の燃料が切れると、一定期間、島全体が通信圏にアクセスできなくなるのです。そのため、エマエ島をはじめ、同様の課題を抱えるバヌアツの島々では、政府・当局が通信アクセスを強化することが重要です。これは、安全な情報が地域に届かないという点で、エマエ島の災害を増大させる要因のひとつとなります。

生徒／(英語で直接バヌアツに話しかけたあと)私たちが得る情報は政府がコントロールできる場合があって、地球温暖化は地球全体が一つになって取り組まないといけない問題なので、私たちが地球全体で認識するためにはどうしたらいいんだろうということが気になっています。

寺島／「私たちの未来について」という今日のテーマで皆さんから意見もいただいていますので、ご紹介します。

「平和な未来にしていきたいです。そう簡単に実現出来る未来ではないと思いますが、私たちが行っているこのボランティアは平和への要にもなっていると私は思います。自分の周りだけでなく、人と人の繋がりがこれからの未来に大きく関わってくるのではないのでしょうか。人間だけでなく全ての生物に優しい環境になってほしいです。平和な未来にするために、私が今できることは人と人の繋がりを広げて、さらに学びを広げていくことだと考えています」(トライ式高等学院千種キャンパス 課題研究講座ボランティアコース 池田愛実子)

村田(慎)／シリアのアレッポやイラクも一時期そうでしたが、いわゆる紛争地帯で仕事をして日本に帰って来ると、日本って本当に平和でいいなって思うんですよね。シリアの内戦の時には学校とか病院がターゲットになって、どんどん空爆されていきました。持てるものも持たず命からがら逃げてきた方々が国内外に沢山いました。我々からすると、彼らは希望を持ちにくい環境にいるはずなんですけど、その中でもまた家族に会いたいとか、故郷に帰りたいとか生きるための希望を持っている人が多くて、人間というのはそこまで強くなれるのかなと思いました。同時に日本に帰ってきて思うのは、我々はこういう環境ですので、だからこそ自分がやりたいこと、自分が目標にしたいことっていうのを持てるはずなんですよね。自分たちはすごく恵まれた環境にある、だからやらなければいけない、やった方がいいと私は強く思います。



寺島／今回のボランティア・アワードで「人と人の繋がり」というのが大きなテーマになっていると思いますが、そんな中で村田諒太さんはどんなふうに考えていらっしゃいますか?

村田(諒)／ボクシングは個人競技ですから、どうしても勝った人間が目立つんですけど、リングに上がるという役割を自分がいただいているだけであって、いろんな要素の中の一部でしかないんです。主役であるかも知れないけれども、主役であっても役の一部でしかない。それを教えられるのがボクシングで、最初は僕も自分が自分が出て思っていたんですけど、やればやるほど、どれだけ人に助けられているかとか、どれだけこの役をいただいていることがありがたいかということに気づいていきました。

鎌田／フランクルの「夜と霧」を自分の大事な本だっておっしゃっていましたが、どこが一番村田さんを支えていますか?

村田(諒)／「夜と霧」は、ナチス・ドイツの収容所で収容されたユダヤ人の医者さんの話なんです。人権もない生きる希望もない中で、どうやって生き延びたかということが書いてある本なんです。これは別の本の中に書いてある言葉なんですけど、そういう状況の中でどうやって生き延びるかという「人生に対して意味を求めろな」と。人生からの問い掛けに対して答えていく。瞬間瞬間、人間は問われている、その間にどう答えていけるかが大事であって、その連続でしかない。自分の人生を見てもそうですけど、与えられた一瞬一瞬に対してどう一生懸命応えていけるかという連続で、振り返った時に「こんなふうに積み重なっていた」と気づくものなんです。だから、自分の心の中にある火を消して欲しい。その火はものすごく小さくていい。ローソクの火でいい。でも、それを外に持つんじゃない。外に持っていたら風ですぐ消えてしまう。それは誰かを羨む気持ちであったり、誰かのようになりたいとか、それは全部外の物。自分の中にあるその火に気づいて欲しい。その火さえ消さなければ、何かがあった時に燃え上がってものすごい力になる。だから、自分の心と向き合って、心の中にある火を小さくていいからずっと灯し続けて欲しいですね。

鎌田／肉体の勝負をしていた村田さんが、どこかで言葉を持った。僕も親に捨てられて、貧乏な人が捨てられて、その中で生きてきた中で言葉ってすごく大事だった。悲しい時に本を読んで、自分の言葉を掴んでいく。言葉を持つっていうことはすごく大事で、高校3年間の間に大切な一冊を見つけれられるといいなと思いますね。



Q5:高校生だからこそ取り組むべき活動はありますか?

栃木県立小山西高等学校 JRC部 萩原菜々美

中原／大半のことはいつになってもできるので、高校生にしかできないことはあまりないと思うんですけど、高校生がやるからこそその価値はあると思います。例えば、目の前で小学校低学年の子が大きなゴミを捨てたら、「あーこんな小さな子が頑張っているのに、私は何をしているんだろう」って感じると思うんですよ。それが、高校生の皆さんに対して大人から見ると同じことが起こるんです。「高校生がこんなに素敵なことをやっているのに、自分も何かやらなきゃ、自分にも何かできないだろうか」って思うんですね。高校生だからということで具体的にこれをやれという提示はできないですが、今、皆さんがやっている活動をもっと大人や周りに向けて発信していくことが、価値のあることなんじゃないかと思っています。

生徒／自分たちの活動をうまく発信できていないと思うので、これから発信していく力を身に着けたいと思います。

中原／まずは周りの人から伝えるのが一番だと思います。家族、クラスの友達、近所の人たちってどんどん輪を広げて、周りの人の力もうまく借りながらジワジワ広がってほしいと思います。

寺島／会場にいらっしゃる皆さんの中で、「うちはこんなふうに発信を頑張っている」という方いらっしゃいませんか?(手が挙がる)

生徒 防災を広げる活動を行っていますが、コロナ禍前は地域の方々を学校にお呼びして防災講座を開いたりしていましたが、今は動画を作って発信した

り、応急手当の処置や防災グッズを本にまとめたり、災害時に必要となるものをバックにして皆さんにお配りしています。それと、昨日ホテルに栃木県の高校がたまたま3校集まりまして、初対面でしたがSNSでグループを作ることにしたんです。海なし県なので、日本の真ん中から綺麗にしていこうという活動を始めようと思っています。もしよろしければ栃木県のブースに来ていただいて、全国の高校で繋がってこの活動を広げていければと思います。(栃木県立学悠館高等学校 JRC部 星野綾子)

鎌田／発信っていうキーワードから「広げる・繋がる・巻き込む」ということが起きてきて、自分の想像を超えた新しいステージに自分たちのボランティア活動が上がっていくんじゃないかと思っています。そうやって繋がってもらえたら、これまでこのボランティア・アワードを続けてきた意味が見えてきた感じがします。

Q6:大人の組織のなかで活動を進めていくとき、私たち高校生の世代の意見はどのような場面で反映されて形になっていくのですか?

青森県立五所川原農林高等学校 6次産業研究室
安田煌汰、成田彩音、葛西陽奈子、長谷川奈菜、對馬莉穂



川崎／ユーグレナのすることについてお話すると、毎年CFOというポジションが会社の取締役として高校生以下、小学生もいたことがあったんですけど、みんなで一緒にお話をして、どうやらもっとワクワクできるような会社になるだろうとか、私たちが日本の会社で働きたい理由って何だろうとか、そういうお話を、それを認めてくださる方がいてどんどん反映されていくんですけど、突拍子もないことを言っても大丈夫で、向こう側からの機会を待つんじゃないで、私たちが自分からタックルをしに行く。共感してくださる協力者は少なからずどの組織にもいると思うので、そこから始めていく、そのように反映されていくのが私の経験では多いかなと思います。生徒 大人の話や行動を待っているだけじゃなくて、自分たちから行動したり発言することが大事だなと思いました。

鎌田／「川崎レナ語録」って面白いのがいっぱいあって、「本当にいい活動は表彰されない」というのがあるんですけど、このあと夕方に表彰式があるけれども…(笑)。

川崎／私自、スーダンやシリアの難民キャンプの人たちを助けたいっていう思いで小学4年生の時に学校の文化祭に出席して募金活動を始めたんですけど、権限がある人が救世主顔をして誰かを助けるっていうのがすごく嫌だったのに、自分がそうなっていることに気づいたんですね。自分は普通に学校に行っていて、何不自由もない生活をしていて、偉そうに難民キャンプの人を助けるって言うってんだと。自分を上げるのではなく他人を上げる活動をしていかなければならないと感じて、高校3年間ボランティアをやっている中で、自分は3年で終わるけど、支援している人たちは一生続くってことを本当に考えていかなければいけないとすごく感じます。

生徒／私たちは助けてあげるという上からの目線ではなく、同じ人間として一緒に当事者の心に寄り添うことを大切にしています。傍観者でも応援者でもなく、一緒になって地球を良くしていく伴走者でありたいという活動をしているので、レナさんのお話を聞いてすごく共感しました。(名古屋経済大学市邨高等学校 社会科SDGs有志メンバー 浅野有咲)

Q7:高校生ができる、最も有効な紛争地域への支援はどのようなものを教えて欲しいです。

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校JRC・インターアクト部
櫻井まな美、板垣里穂、黒澤菜月、小牧威琉

村田(慎)／私たちが行っている人道援助も、皆さんがされている活動も必ず



対象がいるはずなんです。共感共苦(共に感じ共に苦しむ)という言葉があるんですが、それがどこまでできるか。まずそのためには、知ることが大事です。飛行機で2日もあれば大抵たどり着ける場所に紛争地はあって、私も初めて行った時には違う惑星に来たんじゃないかというくらい衝撃を受けましたが、今この地球上にはそんな苦しい思いをしている人たちがいる。例えばウクライナもそうですし、シリアもそうですし、そういう人たちがいることを決して忘れないということ。それを重ねていくことで少しずつ自分たちの知識も増えていって、その過程でどんどん人と繋がって、インプットだけでなく、自分で発信できるような人になっていけたらいいんじゃないかと思っています。声を上げたり発信をしたりっていうことは、我々大人がするよりも皆さんがやった方が実は強いんですよ。生徒／ウクライナ紛争に対して募金活動を行ったんですけど、自分たちにはお金を寄付することしかできないのってっていうことに疑問を持ちました。紛争について詳しく知ることがなかったので、これからはいろいろな紛争の地域や内容について様々なことを学んで部活を通して発信していけたらいいなと思いました。

鎌田／難民キャンプでは、建物が二つあったら、一つは診療所、一つは学校です。子どもを世界へ飛び立たせるためには勉強なんだ、学校は希望なんだ。皆さんが学校やボランティア活動を通して、未来へ向かって自分たちの希望をどう持つかというのは、とても大切なことだと感じました。

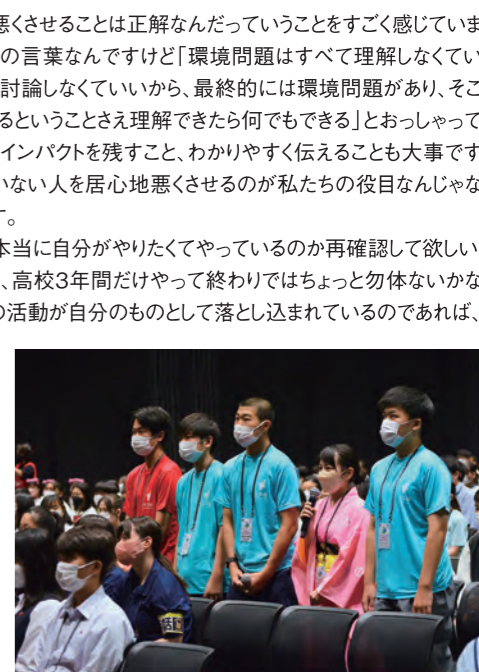
鎌田／私たちの未来は、私たちのこの手に握られているはず。諦めないで少しずつ少しずつ良くなっていく。まず自分の周りから。人を巻き込み、人に発信をし、そして繋がりを、時には巻き込まれて。僕たちには未来を変える力があるんだって信じていることが大事だと思います。

村田(慎)／大事なことは問いを持つこと。どうしてこういう問題が起こっているのか、どうしてこういう紛争が起こっているのか、どうしてこういう弱い立場の人がいるのか。そこで、自分には何ができるのか。一度しかない自分の人生でしたいことは何なのか、そういう問いは誰でも持つことができますので、その問いの中で自分のことここが足りないということがあればそれを埋めていく努力をするということが大事なかなと思います。期待しています。

村田(諒)／皆さんは物凄く力を持っています。僕のジムのトレーナーをやっていた娘さんが通っていたカトリック系の学校で、通学中の生徒を通り魔が襲うという大きな事件が起きました。それで、その娘さんがローマ法王に手紙を出した。学校の先生はそんなことやってって止めたらしいんですけど、実際にその手紙はローマ法王に届いて東京ドームで行われたミサに学園全体を招待してくれた。そういう行動は届きます。その可能性を信じて、これからも挑戦し続けてください。

川崎／人を居心地悪くさせることは正解なんだっていうことをすごく感じています。ある大学の教授の言葉なんですけど「環境問題はすべて理解しなくていい。一つ一つを全部討論しなくていいから、最終的には環境問題があり、そこで困っている人がいるということさえ理解できたら何でもできる」とおっしゃっています。ポジティブなインパクトを残すこと、わかりやすく伝えることも大事ですが、反対に何もしていない人を居心地悪くさせるのが私たちの役目なんじゃないかって思っています。

中原／今の活動は本当に自分がやりたくてやっているのか再確認して欲しい。人生は長いから、高校3年間だけやって終わりではちょっと勿体ないかなと思います。もし、その活動が自分のものとして落とし込まれているのであれば、簡単に手放してしまおうではなく、大人になってからも生活の中にちょっと考える時間を作ってみるとか、やれることをやって欲しいというのが私の願いです。





高校生ボランティア・アワード 2022

特別表彰校



近畿日本
ツーリスト
特別賞
清心女子高等学校
国際系2年(Amour Four Cambodia)



DNP
大日本印刷賞
大阪府立泉北高等学校
泉北レモンプロモーション班



日本ほめる達人
協会賞
熊本県立熊本高等学校
甘味くらぶ



国境なき
医師団賞
名古屋経済大学市邨高等学校
社会科SDGs有志メンバー



新羅慎二賞
広島学園高等学校
じゃかぶる



アイタ設計賞
熊本県立南嶺高等学校
総合農業科環境コース“もっと”木育! 推進班



猿田彦珈琲賞
岡山県立倉敷古城池高等学校
ワッショイ!とーかーす 子ども食堂チーム



東急ホテルズ賞
桐蔭学園高等学校
インターアクトクラブ



マイナビ賞
青森県立五所川原農林高等学校
6次産業研究室



青少年赤十字
創設100周年賞
千葉県立四街道高等学校
JRC同好会



テツandトモ賞
桜花学園高等学校
インターアクトクラブ



カーコンビニ
倶楽部賞
山陽学園高等学校
地歴部



ANA賞
沖縄県立北部農林高等学校
エコ部



DREAM WORLD
HEALTHCARE
PROGRAMME賞
大分工業高等専門学校
足踏みマシンボランティア活動



ミス 清上薬局賞
おかもや山陽高等学校
献血・骨髄バンクチーム



日本財団
HEROs賞
ぐんま国際アカデミー中等部
#yellowforthe future プロジェクトチーム



鎌田賞賞
千葉県立八千代高等学校
図書委員会



香樹賞
甲南高等学校
ボランティア委員会



SOMPOケア賞
静岡県立田方農業高等学校
ライフデザイン科セラビーコース



日本航空賞
徳島市立高等学校
家庭クラブ



ライオンズ
クラブ賞
豊南高等学校
手話(しゅわ)部



ももいろ
クローバーZ賞
三重県立明野高等学校
あかりのプロジェクト



さだまさし賞
香川県立三本松高等学校
三高みんなの食堂プロジェクト



ありがとうございました!

閉会式

年々、ご支援くださる企業・団体が増えていきます。お陰様で、応援団ゲストも含めて過去最多23の特別賞を贈ることができました。この場をお借りして、ご協力くださった全ての皆様に改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参加してくれた皆さんが横に繋がり、来年、再来年にも繋がっていく...



2日間、お疲れさまでした。今回は、一つの大きな転換点になると思います。今年は(新型コロナウイルス)第7波の影響で、一般の方の入場を完全に断りました。その結果、高校生だけで交流できるという空間をつくることができました。栃木の高校生がシンポジウムで言っていたが、たまたま同じホテルだった県内の3校が知り合い、「栃木がこれからのボランティアの中心になっていこう」と繋がった。こうした発想はこれまでなかった。参加してくれた皆さんが横に繋がり、来年、再来年にも繋がっていくと、鎌田先生と夢見た「高校生ボランティア・アワード」の形になっていく...そんな期待が高まる素晴らしい大会だったと思います。皆さん、本当にありがとうございました。 さだまさし

ユース・ボランティアの皆さん



今回、全国から集ってくれたユース・ボランティア。この大会のOB・OGが初めて運営ボランティアとして参加してくれました。こうしてバトンが渡っていくことを今後とも期待しています。

